

大阪 ■ ■

No.46 2014.1.11.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2012

哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313
【E-mail】 oisp@mac.com
【Home Page】 <http://oisp.jimdo.com/>
【代表者】 平等 文博（代表世話人）
【発行・編集者】 同

■ ■ 通信

【連絡先】 657-0037 神戸市灘区備後町 5-3-1-1001

平等気付
電話 & FAX: 078-856-2474

2014年を迎えて

平等 文博（代表世話人）

毎年、本通信の年頭挨拶は山本校長に執筆いただいていた。山本校長は、さまざまなメディアが報じる国内外の動きを日頃からこまめにメモしておられ、それらをもとに世界のそして日本の今の動きのポイントを簡潔にまとめたうえで、必ず読者を勇気づけるようなポジティブな可能性を指摘して挨拶を締めくくられるのが常であった。新たな年の初めに、通信の巻頭文を読むのを楽しみにしておられた会員の方も多かったに違いない。

昨年、かねてよりの山本校長のご意向もあり、世話人会による運営へと哲学学校の組織をあらため、これまでの経緯から私が代表世話人になり、山本先生にはより気軽な立場の顧問に就任をいただいた。

この年頭挨拶を私が書いているのはそういう事情があつてのことだが、山本校長風のものとはとても書く力がない。それに、国内外の昨今の状況を見るにつけ、そこにポジティブな可能性を見出すことは容易な有り様でない。もともと、「一寸先は闇」が政治の常。思うがままに振

舞っているかのように見える為政者たちの足元が、すでに崩れ始めていないという保証はどこにもない。私たちとしては、時々の動きに一喜一憂することなく、それぞれの持ち場で今やれることを地道にやり続けるしかない。

哲学学校にとっての大きな課題の一つは、若い世代と哲学学校とのつながりの構築である。そこでまず、若者に自らを語ってもらう3回のシリーズ「若者の現在」を今月より始める。「働く」「生きる」「表現する」という三つのテーマを立て、各回2～4人の若い報告者に、それぞれの経験や問題意識をもとに自由に話していただくという企画である。年配世代も彼らの話には耳傾けることで、「自分たちの若いころは…」式の見方にとらわれることなく、世代を超えてつながりあう回路を見出すことができるかもしれない。またこれをきっかけに、哲学学校にも若い世代の企画が次々と登場し、内容上の世代交代で哲学学校が再活性化されることを願っている。会員の皆さまと一緒に、今年をそのスタートの年にしたいものである。

年頭に思うこと

井口 昇司（世話人）

いつもどおり犬を連れて海辺の公園へ、見ると周辺の道路に車がずらり。公園では大勢の人が揃って東を向いている。

初日の出か、昨年もそうだったが今年は人が増えている。ここも日の出見物のスポットになったのかと思いつつ雲の間から出てくるお日さまを眺める。

昨年の新年会でも元日の同じ砂浜で日の丸を見たことで「安倍政権発足、今年の日本はどうなるんでしょうか」と話したことを思い出します。

期待に違わず、TPP参加・原発廃止の見直し、アベノミクスの成果を引っ提げて特定秘密保護法案可決・武器輸出三原則の見直しから年末の靖国参拝までアレヨアレヨの大活躍でした。今年の課題は集団的自衛権の行使容認へと向かっているらしい。

なんでこんなに事が進むのかと考えるに、野党の力不足が思い起こされます。

国会論戦で安倍首相・森大臣（ついでに大阪府議会での橋本市長も入れておく）をたじたじとさせる人はいないのか。たとえば正森成二のような人とか（ご存じ共産党の論客、予算委員会でハマコーの首を取った。先日古本屋で入手したこの人の国会論戦の記録を読んで思い出しました）。小泉首相の時も自衛隊の往くところが非戦闘地域だと言質を取った人がいた。

こういう英雄待望論のようなことを言うと、今はそんな時代ではないと平等先生にたしなめられそう。 反省

また考えるのがアメリカによる事態の転回。集団的自衛権の行使などはアメリカの期待するところであろうが靖国参拝となると話が違ってく

る。アメリカの手の内にあるときはよいがそこから脱することは許さない。

アベノミクスの大きな柱は円安であるが、国家による意図的な通貨安誘導がグローバル化の中で許されるか。

今は日本がアメリカに協力して派兵することができることとなるまで様子を見ているが、安倍政権に対しては基本的に戦前に回帰するような右派的なものとして危惧を抱いているアメリカとしては、TPP交渉の進捗とともに円安容認から適正な市場価格へと舵を切るのではないかと。

そうなるとアベノミクス崩壊・安倍政権崩壊どころじゃなくなる。首相交代・政権交代で取ればよいが、千兆円の借金を背景に2%インフレなんてあっち行けで大インフレで日本崩壊なんてことになれば。年金生活者は悲惨です。なんてことを期待して。 反省

年末に平等先生に紹介いただいた「日常哲学派宣言」、著者の松村健吾さんは私と同世代。述べておられることに同調することが多い。

いつまでもスキゾ・キッズであることを（パラボの面もある）確認した新年でした（松村先生がそうであるとは言っておりません）。



朱と碧緑

中村 りょう子（会員）

【朱と碧緑】

オレンジ色とダークグリーンを混ぜると黒一い鼠色になります、補色です。
相、反するふたつの色で少し語ります。

その1 朱（あけ 或いは しゅ）

新年の四日に【足摺岬】へ参りました、はるばる、はるばる、、、実に遠路。

赤道を越えてどっか他国へ行くよりも、もつと遠おーくに感じられました。

バスの終点には西国八十八カ所38番札所【金剛福寺】という壮観な風景に招かれました、識らずして。

太平洋に臨む「展望台」270度の展開、四国最南端とは、斯ういう光、こういう蒼、こういう風。

只管、此の突端の【岬】へ立ちたい一心のみで来たのでした。

遍路宿に以下の文言が掲げられていて、笑ってしまいました。

【長寿の心得】

還暦 60歳でお迎えが来た時には、只今、留守と云え

古希 70歳でお迎えが来た時には、まだまだ早いと云え

喜寿 77歳でお迎えが来た時には、せくな老楽これからよと云え

傘寿 80歳でお迎えが来た時には、なんのまだ役にたつと云え

米寿 88歳でお迎えが来た時には、もう少しお米を食べてからと云え

卒寿 90歳でお迎えが来た時には、そう急

がずともよいと云え

白寿 99歳でお迎えが来た時には、頃を見てこちらからボツボツ行くと云え

八生万才

その2 碧緑（みる）

【ハンナ・アーレント】を師走に観ました。

佳く出来た映画でしたが再度見たいとは思いませんでした。

大昔、15歳の時、【ニュールンベルグ裁判】という映画を観て、未だにその画面と衝撃を忘れ得ないのです。

ほぼ全編が裁判の実況の様であった映像と被告側と原告側との弁術の攻防に終始しておりました、これはあくまで私の古い記憶です。

今でも、憶い出すと頭がずきずきします。

【ハンナ・アーレント】と同様、再びは見たくはありません。

私共は両方とも観ておかなくてはならない「映画」に違い有りません。

お正月に米寿の母にDVD【自転車泥棒】を持参し、共に観ました。

私は5度目です、数年を空けて映画館で3度、サークルで1度観ております。

1948年 伊、ヴィットリオ・デ・シーカ 監督

「ニュールンベルグ裁判」も「自転車泥棒」も第二次世界大戦に繋がる名作だと私は思っています。

そして「ハンナ・アーレント」、此れを観劇中、幾度も「ニュールンベルグ裁判」の画面が脳裏

に現われました、苦しい気分でした。

「自転車泥棒」は大戦直後のイタリアの小さな物語で、直接「戦」の問題は出てきません。

私にとって、此れ等、三作品が心に激しく迫ってきた核芯は【リアリズム】です。

まったく、人の世は一点の曇りなく、「きれいごと」は無い。

人の世は「人」が為す場所、「きれいごと」は有り得ない。

そんな感慨を抱いて居ります。

其の上で、誰もが「善き者」として在りたいと年初は祈ります。

なかむらりようこ

年始のご挨拶と、 若者連続シンポへの準備体操として

丹羽 淳貴（連続シンポ「若者の現在」報告者）

哲学学校ではいつも「若者代表」のようなポジションを演らざるえなくなり、皆様に随分ご迷惑をおかけしていることと思います。

自分でも「若者ってこういうものだよ」という曖昧なイメージでしかお話をできませんので、フワフワとした話を突拍子もなく言っています。

2013年は沖縄で知り合った手相詩人曰く、去年に続き災難の年でありまして、考えてみれば、内定を必死で取り、半年で辞めてしまい、散々だったなと思い返せる年でした。

現在は文章を書きつつ、働ける場所を探しているところです。

さて、しょうもないことをだらだらと書いてしまうと、せつかくの新年に泥を塗ってしまいますので、本題へ入らせていただきます。

仕事を辞めたのは、昨年十月でした。

日に十二時間を超える勤務と、イライラした職場、常に先輩、上司から監視をされ、あらぬ疑いをかけられたり、嫌がらせを受ける毎日でした。

相談できる人もおらず、浪人していた時から大阪哲学学校通信 No46

弱かった精神がすり減り、常にけなされているのではないかという気持ちと、不眠症、胃潰瘍などで体重がみるみる下がっていきました。

腰の痛みが強くなってきたこともあり、お世話になっているカウンセラー、医師と相談し、「半年で仕事を辞める根性無し」になったほうがまだ良いのではないかという結論に至りました。

私の中では、彼女も同じように激務の仕事だったので、電話をしてもお互いのイライラをぶつけ合ってしまうと、その状態が最も辛かったです。余裕やゆとりがどれほど大事かということを感じた半年でした。

辞めてから、今日に至るまで、自分が何故あれほど辛かったのだろうかと考え続けました。

熟年離婚をする老夫婦のように、腰の痛みや残業代のつかない残業は、離婚という結果を生みだした引き金に過ぎず、理由の一端であって、核心ではないと思えてなりませんでした。

もっと、私の、私の感知しない、私の深い部分に問題を抱えていたのではないかと、とずっと頭を悩ませていました。

的確な言葉ではないかもしれませんが、近い言葉として、それは「寂しさ」なのではないだ

ろうかと最近気づきました。

どんなに辛い職場であっても、自分のことを理解してくれている人が一人でもいたのなら、耐えることができたのかもしれない。

「店舗の人間全員が君のこと嫌いだよ」と直近の上司から言われていた私でしたから、誰にも理解されていないと感じるのは仕方ないことだったと思います。

余談ですが、この嫌いということと言われた背後には、私が小説を書きたさに十二時間で仕事を切り上げてしまうことが理由にあったみたいなんです。仕事ができなくて…。という不満が言葉になったのだと思っています。ほかに、顔がむかつくとか言われましたけど(笑)

自分の一番ダメな時期を支えてくれていた彼女にギスギスした態度をとってしまうことで、彼女とダメになってしまうかもしれないという恐怖心もありました。

すべては、寂しいという感情に私が耐えられなかったのです。端から見れば、そんなつまらないことで、仕事を投げ出すのか!とか居場所なんてものは、自分の力が作り上げていくものじゃないか!という正論が聞こえてきますが、そんなことはわかった上で、それでも私は耐えられなかったのです。寂しさに負けてしまいました。

過去を振り返ってみても、知っているフリをしないと馬鹿にされて、その人が自分への興味を失ってしまうのではないかと、とか、とにかく、人の気を、注意を惹きつけておかないとどうしようもなく不安になっていました。

酒を飲めば自暴自棄になり、どれほど人は自分のそばにいてくれるのだろうかと不安になり、暴言を吐き、ののしり、相手を怒らせては、試していたのです。

本当に私は寂しい人間だなと、今回のことを考えてみるとつくづく嫌になりました。

浪人から大学二回までは寂しさが爆発していて、筆では表すことのできない最低な日常を送っ

ていました。今、その病が緩和されているのはひとえに私の寂しさのほとんどを彼女が受け止めてくれているからです。

少し余裕を持てば、自分がいかに恵まれているかがわかりそうなものですが、自分に自信がなく、誰かに承認してもらわないと、生活もままならない私にとっては余裕をもつということが困難な作業なのです。

私は小説家を目指していますが、どうやら自分の中心にあるのは、この「寂しい」ということであるということ。書きたいものは、この「寂しさ」なのだということ、文を書き始めて五年目にしてようやくわかってきました。

どうしようもなく幼稚なテーマかもしれませんが、私にとっては、それが今、もっとも体の核となり、書く原動力となっているのです。

●寂しい若者たち

小説を書いていて思うことは、これはいったい誰が受け取っていくのだろうか、ということ。寂しいというキーワードで、得体のしれないモヤモヤしたものを小説で描けたとして、誰に届くのでしょうか？

おそらく、それは、私に近い年代なのだろうかと、少しずつ確信してきています。

個性が重視され、私たちは連帯感を覚えずに育ってきました。「みんな違って、みんな良い」そんなのは、はっきりとした自分の考えがある大人の意見です。

人のマネをして、好きな人に、尊敬する人に近づこうとして、周囲を見渡しながらボンヤリと自分というものを限定していく。そうした作業を一足飛びにして「何でもいいよ」と投げやりにされてきたのが私たちなのではないでしょうか。

確固としたものを持たなければいけないというプレッシャーを感じて、マネをすることもできなくなり、ただやみくもに新しいものにすが

りついていく若者を僕は嫌というほど見てきました。

自分探しに疲れた若者は一時「普通」を目指していました。普通という平均点に集まることで、個性に対抗し、連帯感を強めていきました。そこには、暗黙の結末があり、実に強固な意志を生み出しました。しかし、普通というものをいくら目指しても、普通にはなりえない。もうすこし、踏み出して、あまり特殊ではないものの、すこし自分を表現してみようか、という動きが、現在生まれてきているのです。

ネット右翼や、アイドルグループの追っかけなど、わかりやすい価値観の中で強く連帯することで自信と個性を持つようとしています。

今の時代でも、ハングリー精神を持ち、向上心を原動力動く人もいます。ですが、大半は既存の「すごそうなもの」に執着をするようになってしまっています。

勝ち組、負け組という言葉が流行したころ「すごそうなもの」に執着していた若者たちはフューチャーされましたが、あまり良くない大人に飲み込まれてしまったり、地味な努力と基盤固めでしか上に登れないという壁にぶち当たっています。ちょうど今の橋下知事のように。

認められたいのも、繋がりたいのも、自信を持ちたいのも、私は「寂しい」からだと思っています。

お腹がすいたわけではなく、上りつめたいからでもなく、私たちの行動原理は「寂しさ」にあるのです。

小さな幸せで十分だという若者たちは、小さな幸せを失った時の寂しさを知っているのです。寂しさから逃れられる時間のためには、仕事に熱中することや、恋人と過ごすこと、アイドルを追っかけること、ネットの中で生きること。多様な方法があり、皆、寂しさを怖がって生きているのではないのでしょうか。

●若者の言葉をわかってもらうための参考文献
大阪哲学学校通信 No46

哲学学校では年明けに、若者についての連続シンポジウムがあります。貴重な場所をいただき、本当にうれしく思っています。

今、私がつたない文章で、浅はかな考えを書かせていただいたことだけでは到底若者という存在は理解できないことと思います。

すこしでも若い人たちの言葉の届くように、メディアで若者を取り扱っているものをいくつかご紹介させていただきます。

どれも若い人には人気がありますが、あまり聞きなれない方も多いと思います。若い人にとっては、どれも有名なものですが…。

★漫画

「おやすみプンプン」 浅野いにお 全十三巻 小学館

ぶんぶんという少年の物語です。作者の表現の仕方がとても難解で、いろいろな解釈を生みだしています。しんどく思われるかもしれませんが、作者の作品はどれも若い人たちにとって、痛みに近い共感を生み出している唯一の漫画家です。

★映画

「桐島、部活やめるってよ」 原作 浅井リョウ 監督 吉田大八

映画がすごく好評であり、原作も若い人にとっての当たり前を忠実に表現することができている作品です。浅井リョウさんは直木賞作家になりました。桐島というカリスマ的な男子が部活をやめてしまうことで、周囲に影響を与えていく物語ですが、若い人たちの影響の仕方というもの鮮明に表れています。

★小説

「インストール」 綿矢りさ 河出文庫

こちらは芥川賞作家です。女子高生の「何物にもなれない苛立ち」が迫ってきます。何一つ

不自由がないにもかかわらず、私たちは苛立ち、すべてを捨てて、あたらしく生まれ変わってしまいたいと思うのです。

★音楽

「ももいろクローバーZのライブ動画」 YOUTUBEなどでご覧いただけます

PVなどではなく、必ずライブ動画を見ていただければと思います。会場全体が一つとなり、波のように揺れ、一体となっています。宗教にもたとえられる昨今のアイドルですが、象徴的なグループであります。

以上、ごく簡単に申し訳ありませんが、きっと若者を理解していただくにあたって、補填的な役割を担ってくれると思います。もちろん、シンポジウムで実際の若者の声を聞いてくださることが一番の理解につながると思います。

●最後に

新年より、大変ながたらしく実の少ない文章を読んでいただきありがとうございました。

「普通」という言葉は平均点の中心を意味しております。私たちの「普通の若者」という感覚も、それぞれの中の、平均点の中心から生まれてくるイメージです。

ただ、もう少し視野を広げていただいて、「普通」の中心点を見つめるのではなく、大きな円のように「普通」をとらえていただいて、いろいろな人が「普通に」入り込めるように整理していただければ、若者という抽象的な存在がおぼろげに理解できるのかなと、おもっています。

本当に「普通」の若者など、どこにもいません。かつて、若者自身が目指し、どこにも存在しなかった理想像なのでから。そんな偶像より、それぞれのリアルな立場を見つめ、全体を俯瞰し、若者の普通を考えていただきたいのです。

最後になりましたが、手相詩人の言葉を信じまして、今年度は良き年になりますように、自分の足元から少しずつ耕していきたいと思っています。皆様におかれましても、益々の発展と、私を哲学学校の愚弟として本年度も可愛がっていただけることを、心よりお祈りしております。

浄土真宗から唯物論へ

橋本 直樹（会員）

昨年の大阪哲学学校での融通念仏宗についての研究発表をさらに掘り下げて、今年中に一冊の本にまとめたいたいと考えている私は、今のところ、その本の主題の一つとなる浄土宗ならびに浄土真宗への批判のために、その研究発表では取り上げられなかった、あの歎異抄を読んでいるところだが、それを読んで痛感するのは、浄土宗の開祖である法然を批判した明恵を私が支持して、菩提心、すなわち悟りを求める心を放棄した仏教は、もはや仏教ではない、などとい

くら主張しても、在家の私たちが、出家した僧侶と同じような修行をすることなく悟りを得ることが、果たして可能なのだろうか、という疑問である。

しかし、だからといって、私たちは悟りを諦めて阿弥陀如来による救いを求めるしかない、ということはないはずである。少なくとも、融通念仏宗を支持する私の立場から言えば、かつてその開祖である良忍の前に現れた阿弥陀如来が説いたという融通念仏によって、在家の私た

ちでも悟りを得ることは可能なのである。

それにしても、歎異抄の中でも特に有名な「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」という一文は、実は親鸞が、彼の師である法然の言葉を引用したものだ、という説を紹介したNHKの番組をもとにした、NHK出版の本を、私は最近入手したが、そのことから浄土宗と浄土真宗とのつながりは明らかであり、浄土宗と浄土真宗をひとまとめにして論じることの根拠も、そうした事実にあるといえるだろう。

そのいわゆる悪人正機説も含めて、法然や親鸞の場合、良忍のように阿弥陀如来が彼らの前に現れて、彼らの主張の元になるような教えを説いた、ということではなく、彼らはあくまでも仏教の経典や高僧の著作を研究した末にそうした結論に達したようだが、そんな彼らの教えに従って、阿弥陀如来による救いだけを信じ、「南無阿弥陀仏」と唱え続けた人々は、本当に極楽往生できたのだろうか。現在、日本の仏教宗派の中で最も多くの信者を有し、おそらく古来よりそうだったであろう浄土真宗と浄土宗の信者の多くが、実はその死後、極楽ではなく地獄に堕ちていたとしたら、彼らの祟りによって、浄土真宗あるいは浄土宗という教団はおそらく壊滅に追い込まれていたに違いない。

しかし実際には、浄土真宗や浄土宗は現在に至るまでその勢力を維持している。これこそ、親鸞や法然の教えが正しいことの証しであり、彼らが皆その教え通りに極楽往生している証拠にほかならない。浄土宗や浄土真宗の信者はおそらくそう主張することだろう。だがその事実は、別の解釈

によって説明することもできる。それは、地獄という世界が脱獄不可能な刑務所のようなところであって、一度そこに入った者は二度とそこから出られない、だからその真相が未だに暴露されていないのだ、という解釈である。しかしさらに第三の、より現実的な解釈も成り立つ。それは「死人に口なし」、つまり人は死んだらそこで全てが終わるのであって、死後の世界が生前に信じられていたものとは違っていても、そのことを逆恨みするどころか、そのことを誰かに告げることも、いや、そのことについて考えることさえできない、だからからこそ、そうはならないのだ、という解釈であり、その背景にあるのは唯物論という考えである。

法然や親鸞はもちろん、そんなことは全く考えていなかっただろう。しかし、彼らの教えを受け継ぎながら教団を拡大あるいは維持してきた僧たちの中には、そうした考えを持ち、法然や親鸞の教えをあくまでも方便として説いていた者がいたかも知れない。というより、そんな人物は一人もいなかった、という証拠はどこにもない。つまり、浄土宗や浄土真宗のように広義の世界観を持たない、ある意味で偏狭な仏教宗派は、その偏狭さゆえに、いわば「偽装された唯物論」とみなすことのできるのである。

仏教本来の教えからはもとより、法然や親鸞の教えからも大きくかけ離れたそんな考えをも受け入れる、浄土宗や浄土真宗、特に浄土真宗の教義が、現代にも通じると言われる根拠は、そうしたところにあるのかも知れない。

大阪哲学学校へのご案内

大阪哲学学校は1986年に「生活と哲学の接点」となることをめざして開校した、市民による開かれた自主的な文化運動団体で、思想信条を問わずどなたでもご参加いただけます。哲学学校を維持するために、会員になっていただける方を随時募集しています。年会費は2千円で毎年1月に更新です。会員には、企画を提案したりホームページから催しの配付資料をダウンロードできるなどの特典があります。催し受付にてお申し出いただくか、メールでご連絡ください。

「カラマーゾフ的世界万歳！」批判

義積 弘幸 (会員)

山城むつみが、『ドストエフスキー』(講談社)の参考文献にあげ、その解釈にも大きな影響を与えた武田泰淳の「カラマーゾフ的世界ばんざい！」の「血のつながりがあるからには、かの悪漢スメルジャコフでさえも(カラマーゾフの世界に)含まれていなければ、作者ドストエフスキーは満足しなかったはずです。」(注1)と述べていることについて、少し考察してみたい。

ところで、スメルジャコフにまでたどり着く前に、かなり遠回りするが、気になった登場人物たちを順番にたどっていくので、その点、ご容赦願いたい。

『カラマーゾフの兄弟』(原卓也訳・新潮文庫)で、父親フォードル殺しの容疑者になった長男ドミトリーは、法廷で被告人として「苦悩によって汚れをおとします！・・父親の血に関しては、僕は無実なんだ！・・僕は最後まであなた方と、戦う、その先は神さまが決めてくださるでしょう！」と言う。彼は、最終的には、すべてを神にゆだねたのである。

次に、次男イワンは、その頃、「病気でまぎれもない精神錯乱(自らの分身・悪魔と対話もしている)と熱病の発作にかられていた」。それは、スメルジャコフとの三度目の対話において、スメルジャコフが真犯人であることを確信したからである。それで、これまでスメルジャコフに「すべては許される」と言ってきたことが、彼に「父親を殺してもいい」というささやきに聞えてことで、間接的ではあるが、自分が関わっていたことを自覚したのであった。三男アリオージャに何度も「あなたじゃない」と言われるごとに、イワンはひどい自責の念を感じてきたのである。

しかし、悪魔(イワンの分身)との対話の途

中、アリオージャの登場で悪魔は消える。イワンはアリオージャと絶交すると言っていたのだが、それは緊急の知らせだった。「1時間前にスメルジャコフが首を吊ったんですよ。(つまり、自殺したのである)『だれにも罪を着せぬため、自己の意志によってすすんで生命を絶つ』という遺書を残して。それを伝えるためにアリオージャはイワンのところへ急いで来たのである。

それから、アリオージャは、イワンの部屋に入り、話をする。イワンが寝た後のアリオージャの思いを作者は次のように書いている。少し長いが引用しておく。

《「傲慢な決心の苦悩なのだ、深い良心の呵責だ！」兄の信じていなかった神と、真実とが、いまだに服従を望まぬ心を征服しようとしているのだ。「そう」すでに枕に横たえたアリオージャの頭の中を、こんな思いがよぎった。「そうスメルジャコフが死んでしまった以上、もはやイワンの証言なぞ、誰も信じないだろう。でも、兄は行って、証言してくれる！」アリオージャは静かに微笑した。「神様はきっと勝つ！」彼は思った。「真実の光の中に立ちあがるか、それとも、自分の信じたものに仕えた恨みを自分やすべての人に晴らしながら、憎悪の中で滅びるかだ」アリオージャは悲痛に付け加えると、またイワンのために祈った。》(注2)

つまり、イワンは、神への信仰と無神論の間で苦しんでいたのである。イワンは、ドミトリーの裁判に出廷中「精神錯乱と熱病」のため、退廷させられる。その後、カテリーナ(ドミトリーの許嫁であるが、イワンを愛している)の家で「譫妄症になり、意識不明で寝ていた。」そこで、カテリーナは、イワンと「三日前から、ずっと喧

嘩していた。」

そして「ああ、何もかも、あたくしの気違いじみた怒りが原因なんです。法廷でのあの呪わしい一幕を用意したのも、あたくしですわ！あの方（イワン）は、自分が高潔な人間であり、たとえあたくしが、お兄さま（ドミトリー）を愛していても、やはり、復讐や嫉妬から兄を破滅させたりはしないと、あたくしに証明しようとなさったんですわ・・・何もかもあたくしが原因なのです、あたくし一人がわるいんです！カーチャがアリオージャにこんな告白をしたことは、いまだかつて一度もなかったのだから、彼（アリオージャ）は、まさしく、このうえなく傲慢な心でさえ苦痛とともに自己の傲慢さを粉碎し、悲しみに打ち負かされて倒れるほどの、堪えきれぬ苦痛にとらわれていることを感じた。」（注3）つまり、彼女は、懺悔したのである。

最後は、アリオージャ（20歳）であるが、やはり、イワンにとっても《清らかな小天使》であり、「ドミトリーもお前を小天使とよんでいるよ」とイワンに語らせている。

『カラマーゾフの兄弟』の愛読者も、アリオージャについて、作家坂口安吾は「人間の最高のもの」、小林秀雄は「フラ・アンジェリコのエンゼルの如きもの」（ウォリンスキーの言葉）と語っていた。（対話「伝統と反逆」）

しかし、アリオージャは、師ゾシマ長老の死後、死体から「腐臭」がしたのをきっかけに、彼の信仰は揺らぐことになる。父とドミトリーの取り合いになっているグルーシェニカにも出会うが、僧庵に帰った後、「亡きゾシマ長老の声」を聴き、「大地に接吻して」立ちあがったアリオージャは「一生変わらぬ堅固な闘士になっていた」のである。（しかし、もし、続編が書かれていたならば、アリオージャは、信仰を失い、偉大なる罪人になったかもしれないが）

前置きが長くなった。もうこの辺で、一番問題となる登場人物スメルジャコフについて書かねばならない。しかし、武田泰淳以外にスメル

ジャコフも「カラマーゾフ的世界」（これまで述べてきた登場人物たちも含めて・詳しくは、後述）の中に含まれると言った人はいない。と、いうより、スメルジャコフ自体について、じっくり眼を向けた人は、ほとんどいないのである。私の読んだ評論には、ほとんどいなかったと思う。そんな流れの中で、山城むつみが、『ドストエフスキー』において、改めてスメルジャコフに光をあてたのである。それも、武田泰淳を参考にして。山城は、次のように述べている。

《こどもたちが「カラマーゾフ万歳！」と叫んだのは、ほかでもない彼らに囲まれていたからこそ開花したアレクセイ・カラマーゾフの僥倖としての善良さに対してだ。この左右反転陰画であるスメルジャコフも含まれる。こともたちは、アリオージャの善良さをそのありえない幸運さにおいて言祝ぐようにスメルジャコフの邪悪さをそのありえない不運さにおいて憐れむのだ。彼らはアリオージャとスメルジャコフを両端とする「カラマーゾフ」の全スペクトル（ゾシマ、ドミトリー、イワン、フョードル、グルーシェニカ、カチェリーナ、等）に対して「万歳！」と絶叫したのだ。それは「大交響曲のどんづまりのキーの一打ち」（武田泰淳「カラマーゾフの世界ばんざい！」）のように響いている。》（注4）

これは、武田の読み方を踏襲しているといってもかまわないだろう。しかし、スメルジャコフの「父親殺し」（イワンから吹き込まれた「すべては許される」という思想による計画的犯行）を無視することはできない。彼は「懺悔」もせず、「悔い改め」もせず、「すべては許される」という思想をもったまま自殺したのである。また、スメルジャコフは、幼い頃から猫を殺し、葬式ごっこが好きだという変な子供であった。また、イリュージャの愛犬の餌であるパンに、針を仕込んだ（この犬は、イリュージャのもとから、走り去ってしまい、もどつてこなかった。もどつてきたという説もあるが）のもスメルジャコフであった。彼には、生き物の「命」の重さがわかっ

ていないのではないだろうか。それを「カラマーゾフの血をうけついでいる（スメルジャコフは、フォードルの私生児であった）」ということだけで、あとの三兄弟（いや「カラマーゾフ的世界」全体）と一緒にしてよいのか、私には疑問である。

私も、『カラマーゾフの兄弟』の中の最後の部分、子供たちの叫ぶ「カラマーゾフ、万歳！」は、最も好きな場面だが、今、思っているのは、三兄弟が、それぞれに「カラマーゾフ的」と言い合っているのに対し、スメルジャコフは「カラマーゾフ的」と言われたことはない。さらに、中村健之介は『ドストエフスキー人物事典』（朝日選書）の中で、彼の名は「パーベル・フォードロビッチ・スメルジャコフ」であり、「彼は、カラマーゾフの兄弟とは認めてもらえない哀れな下男でしかありえない者なのだった。」と述べている。この指摘からも、私は、スメルジャコフは、「カラマーゾフ的世界」には、含まれないと思うのである。

ところで、ここからは、別の面から、スメルジャコフという人物について見ていこう。

私は、ドミトリー、イワン、アリョーシャの三兄弟が、お互いに自分たちのことを「カラマーゾフ的」と呼び合っていると述べたが、私はロシア語については、まったく知らない。したがって、これから書くことは、『謎とき「カラマーゾフの兄弟」』（新潮選書）を書いた江川卓の翻訳を全面的に信じて書くことになる。それは、この本が手に入りやすく、一般の読者にとって、読みやすいからである。しかし、これは、私の決断において行うことで、そこに誤りがあるとしても、それはひとえに私が責めを負わねばならない。そのことは十分承知している。そう思って（特に、ロシア文学者の方）は読んでいただきたい。

江川の前掲書によれば、「カラマーゾフ」とは「黒塗り」と字解きするのが、最も正統的な解釈であると述べているが、それは外面的なことで、

内面的には、「好色（強烈な情欲）」、「生への渴望」、「冷酷」、「残忍」、「地上的な、凶暴な力」と江川は述べているが、それは、江川が『カラマーゾフの兄弟』を読んで解釈し、形容したことだと考えている。

三兄弟を見てみると、ドミトリーは、自らを「おれは放蕩を愛し、放蕩の恥辱まで愛した。残忍なことを愛した。だっておれは南京虫、人にあだする虫けらなんだもの。なんのことはない—カラマーゾフなんだものな！」、イワンは「こいつはある意味でカラマーゾフ的な特質でね、これは本当だよ、この生への渴望、何があろうと生を渴望するっていうのは、おまえ（アリョーシャ）の中にもひそんでいるよ」などと言う。

また、ラキーチンは、アリョーシャのことを「やっぱりきみもカラマーゾフなんだな・・・父からは好色を、母親（フォードルの後妻・イワンの母でもある）からはユロージビィー（聖痴愚・義積）の血を受けついでわけだ」と形容している。アリョーシャも自分のことを、リーザに「ぼくは、もういろんなことに触れすぎているんです・・・ぼくだってカラマーゾフですからね」と言う。また「地上的な、狂暴な力・・・この力の上にも神の精霊が働いているのだろうか—それさえぼくにはわかりません。わかっているのはただ、僕自身もカラマーゾフだということです」というほどである。

それに対してスメルジャコフについては、江川は、どうも《去勢派（ロシア正教からの分離派）》にしたがっているように感じる。この解釈は、まったく江川説であって、私とは、直接関係があるとは言えないのであるが、しかし、正しい仮説かもしれないので、紹介だけはしておこうと思う。このことについて江川は何度も繰り返し、指摘しているから。そこを簡条書きしておく。（注4）

スメルジャコフは「去勢者」ないし「去勢派信徒」であって、だからこそマリヤとも「同居」しながらも「同棲」しないのである。

去勢派信徒たちは一様に「痩せて黄色っぽい顔」をしていた。

「イワンは怒りと嫌悪の目で、びんの毛をきれいに撫でつけ、ふっくらと前髪を立てたスメルジャコフの〈去勢者のように痩せこけた顔〉をにらみつけた。」

「モスクワへ料理人の修業に出されて戻ってきた彼（スメルジャコフ）は、すっかり面変わりがしていた。なんだかふいにめっきり老けこんだ感じで年齢にまったくそぐわないくらい皺だらけになり、〈顔色は黄ばんで、去勢者に似た感じ〉になっていた。」

「モスクワから戻ったイワンが、はじめて病院にスメルジャコフを見舞ったとき、・・・身体はひどく弱っていて、舌を動かすのもやっとなのように、ゆったりした口のきき方をした。それに〈すっかり痩せて、黄色い顔〉をしていた。・・・〈去勢者のような〉ひからびた彼の顔は、ひどく小さく

なったように見え・・・」であったと形容している。

つまり、江川は、少なくとも、スメルジャコフは、「好色なカラマゾフ」とは異なり、「性的倫理観が異常に堅固であるか、性的に淡白」だという説を展開しているのである。私は、この説を全面的に支持するわけではないが、ここでも、スメルジャコフは「カラマゾフ的」であることの例外的存在であるということを補っておきたかったのである。

(注1) 『武田泰淳全集』(第16巻・筑摩書房)「カラマゾフ的世界ばんざい！」

(注2) 「第11編 兄イワン 10 「あいつがそう言ったんだ」

(注3) 「エピソード 1 ミーチャ救出計画」

(注4) 『謎とき「カラマゾフの兄弟」』(イ・白いキリスト・江川卓・新潮選書)

〈知の歴史〉入門講座

ハンナ・アーレント

ドイツのマルガレーテ・フォン・トロツタ監督による映画『ハンナ・アーレント』が京都と神戸で上映中です (http://www.cetera.co.jp/h_arendt/)。ハンナ・アーレント (1906-1975) という哲学者はどういう時代体験をもち、どういう哲学的反省を行い、どんな著作を残したのでしょうか。またとりわけその政治哲学、政治思想の現代的意義はどこにあるのでしょうか。今年の「知の歴史入門講座」はハンナ・アーレントを取り上げ、3回シリーズで行うことにします。ぜひこの機会にハンナ・アーレントに取り組んでみてください。

◆場所：尼崎市立中央地区会館 参加費：各回千円（割引制度あり）

●第1回 3月8日（土曜日）午後1時半から5時

「ハンナ・アーレント入門」

講師・三浦隆宏さん（椋山女学園大学専任講師、哲学）

●第2回 3月22日（土曜日）午後1時半から5時

「ハンナ・アーレントとマルクス」

講師・百木漠さん（京都大学大学院人間環境学研究所後期博士課程）

●第3回 4月12日（土曜日）午後1時半から5時……予定

「ハンナ・アーレント政治思想の現代的意義」（仮）講師（交渉中）

